

『拍案驚奇』卷三十一における「陸信州」とは誰か

市瀬 信子

凌濛初著の『拍案驚奇』全四十巻は、明代を代表する白話短編小説集である。この巻三十一は、妖術を使い、民衆を率いて蜂起したと言われる、明代の唐賽児という実在の女性をモデルにした物語である。

この物語の前には「入話」と言われる部分がある。そこに「陸信州」という人物が出てくるのだが、これまでこれが誰を指すのか明らかにされてこなかった。そこで物語を読み解く鍵の一つとして、「陸信州」とは一体誰なのかを明らかにしてみたい。

〔キーワード、凌濛初 拍案驚奇 陸信州〕

はじめに

明の凌濛初(一五八〇～一六四四年)が撰した『拍案驚奇』、『二刻拍案驚奇』(「二拍」と併称される)は、馮夢龍(一五七四～一六四六年)の『警世通言』、『醒世恒言』、『喻世明言』(「三言」と併称される)と共に、宋元以来の白話短編小説集の代表作とされる重要なものである。

『拍案驚奇』(全四十巻)の各巻は、入話と正話の二話から構

成されている。その中の巻三十一の正話は、明代永楽年間¹に起きた唐賽児の乱を題材にしたものである。唐賽児の乱とは、山東一帯を席卷した大規模な民衆反乱であり、白蓮教徒の反乱、あるいは農民反乱の代表的なものとして、明代史の中で大きな位置を占めている。

一方入話の方は、唐の皇甫枚の『三水小牘』中の「侯元」の物語をほぼそのまま引用している。²

入話とは、正話の内容に相通じるものを導入部として語るものであり、いわば話の枕にあたる。よって、入話と正話の内容は、

非常に関連が深い。卷三十一の正話である唐賽児の物語は、妖術を身につけた唐賽児という女性が、多くの人を配下に従えて反乱を起こすが、最後には敵の策略にはまって殺され、乱が鎮圧される、という物語である。よって、正話の前に置かれた入話も、侯元という男が、やはり妖術を身につけて反乱を起こし、やがて失敗して命を落とすという物語となっている。

その入話の中に登場する「陸信州」なる人物が本論の主人公である。

一 「陸信州」の登場場面

入話のあらすじは次のようなものである。

唐の乾符年間、上党銅鞮県に侯元という樵夫がいた。ある時、山で神君と名乗る老人に出会い、法術の奥義を授けられる。術に習熟し、呪文によって草木土石を兵士に変えることができるようになる、神君の戒めを破って、若者達を率いて乱を起こす。しかし結局失敗して潞州兵に捕えられてしまう。一度は逃げたが、次第に方術の力は失われ、最後には并州の將校に斬り殺される。さて、この物語に続けて、凌濛初は自分の意見を次のように述べる。

可見悖叛之事、天道所忌。若是得了道術、輔佐朝廷、如張留侯、陸信州之類、自然建功立業、伝名後世。若是萌了私意、打点起兵謀反、不成見有妖術成功的。從來張角、徴側、徴二、孫恩、

盧循等、非不也是天賜的兵書法術、畢竟敗亡。……

このことから謀反を起こすという事は、天道の忌むものであることがわかります。もし道術を身につけて朝廷を輔佐したのであれば、張留侯や陸信州といった人々のように、おのずと功業を立て、名を後世に伝えることとなったでしょう。もし私心が芽生えて、兵を挙げ謀反を企んだとなると、妖術で成功したものは嘗ていた試しがありません。これまで張角、徴側、徴二、孫恩、盧循といった人々は、みな天から兵書方術を賜ったではありませんが、結局は失敗して滅ぼされてしまいました。……

ここでは道術を身につけて朝廷を輔佐し、成功した者の実例と、かたや道術を利用して反乱を起こし、悲惨な結末を迎えた者の実例とを並べ、謀反というものがいかに空しいものであるかを説いている。

道術を身につけて成功した者は張留侯、陸信州の二人。逆に悲惨な結末を迎えた者は、張角、徴側、徴二、孫恩、盧循の五人となっている。この中で、反乱を起こしたとされる後半の五人の人物については、凌濛初は姓名ともに記している。また各種史書にも彼らに関する記載がある。彼らの関わった反乱はいずれも中国史の中ではよく知られた事件であるから、当時の読者はすぐに彼らの名と反乱の内容を結びつけて理解できただろう。

例えば、張角は後漢末の黄巾の乱の首謀者である。霊帝の時に自らを「大賢良師」と名乗り、黄老を奉じ符水呪説を用いて病人

を治療して人気を集め、太平道を創設し、中平元年（一八四年）に蜂起した。しかしこの反乱は、結局一年足らずで平定され、張角は乱の中で病死している。^② 徴側、徴二は、後漢の姉妹である。漢の建武十六年（四〇年）に交趾（今のベトナム）において挙兵し、徴側は王を名乗ったが、乱は建武十九年に平定され、姉妹は二人とも斬殺された。^④ 孫恩、盧循は晋末に天師道（五斗米道）教徒を率いて華中華南にかけて反乱を起こした。孫恩が海に身を投じて死んだ後、盧循が信徒を率い、計十数年にわたって反乱を続けたが、盧循も最後は追いつめられて、海に身を投じて自殺した。^⑤ つまりこれらの人物は、全て反乱を起こした結果、失敗して死にいたっていることが明らかであり、凌濛初の「兵を挙げ謀反を企んだとなると、妖術で成功したものではありません。」という記述通りである。

ところが、朝廷を補佐したとされる張留侯、陸信州の二人は、姓は記してあるが、名は記されていない。留侯、信州はもちろん本名ではない。「張留侯」の方は、王古魯が、当該箇所「張留侯：漢張良、封留侯（張留侯：漢の張良、留侯に封じられる）」と注をつけている。^⑥ また『史記』卷五十五には「留侯世家」として張良の伝があり、次のように記されている。

留侯張良者、其先韓人也。……良嘗閑從容步游下邳圯上、有一老父、衣褐、至良所、直墮其履圯下、顧謂良曰、「孺子、下取履。」良鄂然、欲殴之。為其老、彊忍、下取履。父曰、「履我。」良業為取履、因長跪履之。父以足受、笑而去。良殊大驚、

隨目之。父去里所、復還、曰、「孺子可教矣。後五日平明、與我會此。」良因怪之、跪曰、「諾。」五日平明、良往。父已先在、怒曰、「與老人期、後、何也。」去、曰、「後五日早會。」五日鷄鳴、良往。父又先在、復怒曰、「後、何也。」去、曰、「後五日復早來。」五日、良夜未半往。有頃、父亦來、喜曰、「當如是。」出一編書、曰、「讀此則為王者師矣。後十年興。十三年孺子見我涑北、穀城山下黃石即我矣。」遂去、無他言、不復見。旦日視其書、乃太公兵法也。良因異之、常習誦讀之。……良數以太公兵法說沛公、沛公善之、常用其策。……漢六年正月、封功臣。良未嘗有戰鬪功、高帝曰、「運籌策帷帳中、決勝千里外、子房功也。自損齊三萬戶。」良曰、「始臣起下邳、與上會留、此天以臣授陛下。陛下用臣計、幸而時中、臣願封留足矣、不敢當三萬戶。」乃封張良為留侯、與蕭何等俱封。」

（『史記』卷五十五 留侯世家）

留侯張良は、その先祖が韓の人である。……良はある時、のんびりと下邳の土橋の上を散歩していた。すると一人の粗末な服装をした老人が、良の側までやって来て、わざと自分の履物を土橋の下に落とし、良の方を振り向いて言った、「若僧、下において履物を取れ。」良は愕然として殴ろうとした。しかし年老いているので、ぐっと堪えて、下りて履物を取って来た。老人は「わしに履かせろ」と言った。良はすでに履物を取って来ていたので、跪いて履かせてやった。老人は足で受け取ると、笑って去って行った。良は非常に驚いて、その姿を目で追った。老人は一里ほど行って再び引き返してく

ると、言った。「若僧は教えられそうだ。五日後の夜明けに、わしとここで会おう。」良は不思議に思いながら、跪いて言った、「承知しました。」五日後の夜明け方に、良は行った。老人はすでに先に来ていて、怒って「老人と約束しながら、遅れるとは何ごとだ」と言い、立ち去ろうとしながら、「五日後、早朝に会おう」と言った。五日後鶏が鳴く頃に良が行くと、老人は今度も先に来ていて、また怒って「遅れるとは何ごとだ」と言い、立ち去ろうとしながら、「五日後、もう一度早朝に来い」と言った。五日して、良は夜半にならないうちに出かけた。しばらくして老人もやって来て、喜んで「こうでなくてはならん」と言い、一篇の書物を取り出して、言った、「これを読めば王者の師となる。後十年で栄える。十三年すればおまえはわしに済北で会うだろう。穀城山の麓にある黄色の石がわしだ。」そのまま立ち去り、他の言葉はなく、二度とその姿を見ることはなかった。夜が明けてからその書物を見ると、それは太公の兵法だった。良はそこでそれを貴重なものと考え、常にそれを勉強し暗誦した。……良はたびたび太公の兵法を用いて沛公に進言し、沛公はそれを評価して、常にその策を用いた。……漢の六年正月、功臣に領地を与えて侯・公にとりたてた。良は戦功をあげたことはなかったが、高帝は「策を陣営の中で巡らせ、勝利を千里の外で決したのは、子房（張良）の戦功である。自ら斉の地から三万戸の領地を選ぶがよい」と言った。良は「始めに私は下邳で兵を挙げ、主上と留の地でお会いしました。これは天が私を陛下に

授けたのです。陛下は私の計略を用い、幸いにして時宜にかなうことができました。私は留に封じていただければ充分でして、三万戸をいただくとは思いません」と言った。そこで張良を封じて留侯とし、蕭何らと共に領地を与えた。

少々引用が長くなったが、このエピソードは、張良が、凌濛初のいう「道術を身につけて朝廷を補佐し」「おのずと功業を立て、名を後世に伝え」た「張留侯」にぴたりと適合する人物であることを全て証明している。

つまり、まず張良が済北の穀城山の麓にある黄色い石と名乗る不思議な老人から兵法を授けられたこと。これは、まさに道術という不思議な術を授けられた場面と言ってよいだろう。入話で、侯元に方術を授ける神君も、この老人と同じ役割を果たしている。その兵法を用いて劉邦に進言し、劉邦がその策を用いて建國に至ったこと。また建國の英雄として劉邦から認められたことなど、凌濛初のいう「道術を身につけ、朝廷を補佐した」というのにぴたりと符合する。よって、「張留侯」を張良とすることには問題がない。

さて、残るは「陸信州」である。この人物については、王古魯をはじめとし、各種の『拍案驚奇』の注釈本に、いずれも注が付されていない。これは「陸信州」が「張留侯」に比べてより有名な人物であり、すでに史書に記載が多いために、注をつける必要がなかったからか、といえ、おそらくはそうではない。「陸信州」が誰を指すのかを明確にすることができなかったために、注を付

けることができなかつたと推測されるのである。

陳邇冬、郭雋傑校注『拍案驚奇』⁷⁾だけは、「張留侯、陸信州―指西漢建國功臣、張良、陸賈（西漢建國の功臣、張良、陸賈を指す）。」という注を付け、「陸信州」を「陸賈」であるとしている。陸賈は確かに張良と共に漢の建國に功績のあった人物である。ところが、各種の史書を調べてみても、「陸賈」が「陸信州」であることを証明することのできる史料は見あたらないのである。凌濛初の言い方をみると、「陸信州」なる人物は、張良と同じく「道術を身につけて、朝廷を輔佐」してはならない。また同時に「信州」と関連ある者でなければならない。「信州」に關係あると言う場合には、彼がその出身地であるか、あるいはこの地に任官されたことがあるか、あるいはこの地に封じられたことがあるか、などが考えられよう。

しかし、陸賈は劉邦の漢王朝建立の際、確かに張良と共に活躍したのではあるが、張良のように「道術」を身につけていたという記録は全くない。また、「信州」に関する記載も見あたらない。つまり、凌濛初が記した人物の重要な二つの特徴を陸賈はいずれも備えていないのである。よって「陸信州」を「陸賈」とすることはできない。陳邇冬、郭雋傑の校注は、「陸信州」が誰であるかを確かめたわけではなく、「張良」と並列されている「陸」という人物、という根拠で「陸賈」の名を挙げているに過ぎないのである。

では、陸信州とはいったい誰を指すのだろうか。それは、当時の読者にとってもよく知られた人物でなければならないと思われる。

る。

二 陸法和という人物

そこで、筆者が「陸信州」として考えるのは、南北朝時代に生きた陸法和という人物である。以下にその論拠を示してみたい。

(1) 道術で朝廷を輔佐したこと

陸法和（生卒年不詳）は、「侯景の乱」（五四八―五五二年）において活躍した人物である。

侯景の乱とは、侯景が梁に対して反乱を起こし、一時的に帝位を奪った事件である。侯景は初め東魏にいたが、東魏の高澄と不仲であったことから梁に投降し、帰順したかに見せ、やがて梁に反旗を翻した。都である建康を包囲し、台城を陥れて簡文帝を擁立し、次いで簡文帝を殺して、自ら漢帝を名乗ったが、まもなく梁軍によって滅ぼされた。これは皇帝が殺害された上、あわや王朝が乗っ取られそうになったという大事件である。この乱において、陸法和は乱鎮圧のために活躍するのである。

では、陸法和が凌濛初のいう「道術を身につけ、朝廷を輔佐した」人物にいかにか合致するかを見てみよう。

陸法和の伝は、『北齊書』卷三十二、『北史』卷八十九に見える。⁸⁾まず、『北齊書』卷三十二陸法和伝の、道術に関わるとと思われる記載を以下に挙げてみる。

陸法和、不知何許人。隱於江陵百里洲、衣食居處、一与苦行沙門同。耆老自幼見之、容色常不定、人莫能測也。或謂出自嵩高、遍遊遐邇。既入荊州沔陽郡高安縣之紫石山、無故捨所居山、俄有蛮族文道期之乱、時人以為預見萌兆。

陸法和は、どこ生まれかわからない。江陵の百里洲で、衣食や居住をずっと苦行の僧侶達と同じくしていた。老人が幼いときから彼を見ていても、容色はいつも変わり、人は彼を推し量ることができなかった。嵩高に生まれ、各地を遍歴したのだ、という者もいた。荊州沔陽郡高安縣の紫石山に入っていたが、理由も無くそれまで住んでいた山を捨てたところ、にわかに蛮族文道期の乱が起こったので、当時の人は兆しを予見したのだと考えた。

ここでは、陸法和について「衣食居處、一与苦行沙門同」と記している。沙門は、一般には仏弟子を指す語である。凌濛初が用いている「道術」という言葉は、『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社 一九九二年）によれば「道教の術法。方術」とのみあって、仏教のことを指すものとはしていない。しかし、中国にあつては、元来仏教と道教は非常に近いものであり、道教徒も仏弟子も等しく「沙門」と称されるのが当時の通例であつた。また、仏教の性質にしても、道教的な「術」を用いるものと自然に考えられていた。よつて、仏弟子であることと、道術を使うことには矛盾はないと考えてよいだろう。¹⁰⁾

修行を経た陸法和は、他の人には全く予想できなかった文道期

の乱を、一人予見するという異能をまず發揮している。予知能力を持つことは、陸法和がすでに「道術を会得していた」可能性を示唆するものである。

また、それ以外にも、彼と道術との関係を示す場面は多い。

及侯景始告降於梁、法和謂南郡朱元英曰、「貧道共檀越擊侯景去。」元英曰、「侯景為国立効、師云擊之、何也。」法和曰、「正自如此。」及景度江、法和時在青谿山、元英往問曰、「景今圍城、其事云何。」法和曰、「凡人取果、宜待熟時、不療自落。檀越但待侯景熟、何勞問也。」¹¹⁾固問之、曰、「亦克、亦不克。」（同上）

侯景が始めて梁に降伏を告げた時に、陸法和は南郡の朱元英に言った、「わたくし（貧道）は、あなたさまと共に侯景を討ちに行くでしょう。」元英は、「侯景は国のために功績をあげたというのに、あなたはどのようにして彼を討つなどとおっしゃるのでしょうか」と言った。すると法和は「ただそうなるということですよ」と言った。侯景が長江を渡ったとき、法和は青谿山にいたので、元英は出かけていつて尋ねた、「侯景は今町を包囲していますが、どうなってしまうのでしょうか。」法和は「凡人が果実を取るときには、熟するまで待つのがよいのです。取らなくとも自然に落ちましよう。あなたさまはただ侯景の機が熟するのを待ち下さい、尋ねるまでもありません」と言う。それでも強く尋ねたが、「勝ちますし、負けもします」と言うのだった。

まず、言葉の用法から見ると、陸法和は朱元英に対して自称する時、「貧道」という語を用いている。「貧道」は道士や僧侶の自称であり、道術を身につけたものが自らを指している語である。

また、相手に対して「檀越」と言っているのは、僧侶が施主に対して使う呼称であり、法和が自らを普通の人間ではなく、仏教の徒とみなしていることがわかる。実際『北齊書』には、法和が自らを「法和は求仏の人である（法和は求仏人）」という箇所もある。

さて、『北齊書』の上記の場面であるが、最初侯景が梁に降伏を願い出た時、梁に領土十三州を以て帰順することを申し出ていた。そのため、この段階では侯景が梁に対して反旗を翻すことは誰も予測できず、むしろ梁に領土をもたらした英雄と思われるていた。朱元英も当然侯景の謀反など予想していなかったのだが、陸法和だけは「わたくしは、あなたさまと共に侯景を討ちに行くでしょう。」と、その反乱を予言する言葉を朱元英に語りかけて、驚かせている。こういう予知能力はまさに道術に由来するものである。そして予言どおり、この後侯景は反乱を起こし、陸法和と胡僧祐は共に侯景の部将である任約を討ちに行くことになるのである。

反乱が起きた後、侯景が長江を渡って、梁の都まで攻め入って来た時に、朱元英は陸法和の道術の力をもはや信じて疑わず、自ら意見を求めに行くのだが、陸法和からは謎めいた予言の言葉が返ってくるだけであった。乱の現場から遠く離れた場所にいなながら、現場の人間にわからない事件の行く末を予言できる、これもまた、凡人には測れない陸法和の不可思議な能力を伝えている。

やがて実際に陸法和が侯景の軍を討伐に行く時の『北齊書』の描写は、陸法和の不可思議な力を記してより詳細である。

景遣將任約擊梁湘東王於江陵、法和乃詣湘東乞征約、召諸蠻弟子八百人在江津、二日便發。湘東遣胡僧祐領千余人與同行。法和登艦大笑曰、「無量兵馬。」江陵多神祠、人俗恒所祈禱、自法和軍出、無復一驗、人以為神皆從行故也。至赤沙湖、與約相對、法和乘輕船、不介冑、沿流而下、去約軍一里乃還。謂將士曰、「聊觀彼竜睡不動、吾軍之竜甚自踊躍、即攻之。若得待明日、當不損客主一人而破賊、然有惡処。」遂縱火舫於前、而逆風不便、法和執白羽麾風、風勢即返。約衆皆見梁兵步於水上、於是大潰、皆投水而死。約逃竄不知所之、法和曰、「明日午時當得。」及期而未得、人問之、法和曰、「吾前於此洲水乾時建一刹、語檀越等、此雖為刹、實是賊標。今何不向標下求賊也。」如其言、果於水中見約抱刹、仰頭裁出鼻、遂擒之。約言、「求就師目前死。」法和曰、「檀越有相、必不兵死。且於王有緣、決無他慮。王於後當得檀越力耳。」湘東果釈用為郡守。及魏圉江陵、約以兵赴救、力戰焉。（同上）

侯景が將軍任約を遣わして梁の湘東王を江陵に攻撃に行かせると、法和は湘東王のところに行き、任約を伐たんことを乞い、諸蠻の弟子八百人を江陵の津に召し出して、翌日出発した。湘東王は胡僧祐に千人余りの兵を連れて同行させた。法和は軍船に登ると、大笑して言った、「ずいぶんたくさん兵馬ですな。」江陵には神をまつる祠が多く、人々が習わ

しとして恒に祈祷する所だったのだが、法和が出軍して以来、二度と靈験があらわれなくなってしまったので、人々は神が皆陸法和の行軍について行ったからだと考えた。赤沙湖に至り、任約と相対したところで、法和は小船に乗って甲冑もつけず、流れに沿って下り、任約の軍から一里のところまで行って戻ってきた。そして将兵に言った、「見たところ敵の竜は眠ったまま動いておらず、我が軍の竜は甚だ勇躍しているゆえ、すぐさま攻められよ。もし明日を待てば、敵味方の一人も損なわずに賊を破ることができだろうが、まずい所がありましょう。」かくて前方で船に火を放ったが、逆風でうまく進まない。法和が白い羽扇を手に取り風を招くと、風はすぐに向きを変えた。任約の一軍は梁の兵が水上を歩くのを見て、大いに乱れ、皆水に身を投げて死んだ。任約は逃げた鼠のごとく行方知れずになっていたが、法和は「明日の昼時には捕えられましょう」と言った。その刻限になってもまだ捕まらなかったで、人が尋ねると、法和は言った、「私は以前この洲の水が干上がった時に、舍利塔を一つ建て、皆様方に申し上げました、これは舍利塔ではあるが、実は賊の目印なのだ。今どうしてその目印に向かって下りていつて賊を求めないのですか。」その言葉通り、果たして水中で任約が塔に抱きついて、頭を上げてわずかに鼻を出していたので、ついにこれを捕らえたのだった。任約は「師の目前で死なせて頂きたい」と言ったが、法和は「あなた様には戦死しないという相が出ております。また王とご縁があるので、決して

他の心配はいらないでしょう。王は後にはあなたの力を持つことになりましょう」と言った。湘東王は果たして任約を釈放して郡守として任用した。魏が江陵を包囲した時には、任約は兵を率いて救援に向かい、敵と大いに戦ったのである。

任約を討ちに行くときに連れて行ったのは、兵士ではなく、諸蛮の「弟子」である。つまり陸法和は武力を用いるのではなく、法力を用いるために、彼の弟子を従えたのである。任約を攻撃に行くとき祠の神々が陸法和に従ったという人々の噂は、陸法和が神と相通じる不思議な人物であることを際立たせる記述である。またいざ任約軍と相対した時には、やはり武力を全く用いていない。白羽扇を動かして風を自在に操るところなど、『三国志演義』の諸葛孔明さんながらの妖術の使い手である。また、任約が敗退した後、隠れることを遙か以前に予想して、水の中に舍利塔を建てていたというのである。このように、陸法和の戦いは、武將としてのそれではなく、明らかに不可思議な道術を会得した人のそれなのである。

そして、戦いの経過が全て陸法和の予言どおりになったというのみならず、任約を捕らえた時には、後に梁の將軍として活躍することを予見して生かしておくのである。これらは、まさに陸法和が「朝廷を補佐」した場面といえるだろう。

この他にも、陸法和と「道術」の関係を更にはっきりと示す記述が『北齊書』には見える。

梁元帝以法和為都督、郢州刺史、封江乘縣公。法和不称臣、其啓文朱印名上¹³、自称司徒。梁元帝謂其僕射王褒曰、「我未嘗有意用陸為三公、而自称何也。」褒曰、「彼既以道術自命、容是先知。」梁元帝以法和功業稍重、遂就加司徒、都督、刺史如故。部曲數千人、通呼為弟子、唯以道術為化、不以法獄加人。(同上)

梁元帝は法和を都督、郢州刺史とし、江乘縣公に封じた。

法和は臣とは称さず、上奏文の朱印の名の上に、自ら司徒と称した。梁元帝はその僕射王褒に言った、「わしはまだ陸法和を三公に用いるつもりはなかったのに、彼が自分で名乗っているのは何故だ。」王褒は言った、「彼は道術を以て自認しておりまして、あらかじめわかるのでございましょう。」梁元帝は法和の功業を次第に重んじるようになり、ついに司徒を加え、都督、刺史については元のままとした。軍隊数千人は、通常弟子と呼ばれ、ただ道術で教化するのみで、法律投獄を人にほどこすことはなかった。

まだ任命もされていないし、元帝自身にもその意志がないうちから、陸法和は「司徒」という官名を名乗っている。これについて、王褒は「彼は道術を以て自認しております(以道術自命)」と、その理由を元帝に説明している。ここでははっきりと「道術」の語が使われている。また「道術で教化し」た、ともある。これこそ陸法和が「道術を会得」していることを確かに証明するものである。同時にまた、「梁元帝は法和の功業をしだいに重んじ、ついに司徒を加え、都督、刺史については元のままとした。」とい

う記述は、陸法和が道術をもって「朝廷を輔佐」し、「おのずと功業を立て」たことを証拠立てるものであろう。

以上のように、陸法和の「侯景の乱」における活躍は、凌濛初のいう「道術を会得して、朝廷を輔佐した」に相応しいと言えるのである。

(2) 陸法和が信州刺史であったこと

ここまで見たように、陸法和が凌濛初の「道術を会得して朝廷を輔佐した」という記述に相応しい人物であることは疑いない。しかし、『北齊書』、『北史』いずれにも陸法和と「信州」との関係を表す記述は見あたらない。『南史』にもやはり「信州」との関連を示す記載はない。よって、これらの史料からは、陸法和が「陸信州」であることは証明できないのである。

ところが、『梁書』を見てみると、陸法和の伝は無いのであるが、侯景の乱に関する記載があり、その中に二箇所にわたって「信州刺史陸法和」という表現が出てくるのである。

(武帝五年) 五月癸未、湘東王繹遣游擊將軍胡僧祐、信州刺史陸法和援巴陵、景遣任約帥衆拒援軍。

(『梁書』 卷四 簡文帝本紀)

(武帝の五年) 五月癸未、湘東王繹は、遊擊將軍胡僧祐、信州刺史陸法和を派遣して巴陵の援軍に行かせたが、侯景は任約を遣わして民衆を率いて援軍を拒ませた。

五月癸未、世祖遣游擊將軍胡僧祐、信州刺史陸法和帥衆下援巴陵。任約敗、景遂遁走。以王僧弁為征東將軍、開府儀同三司、尚書令、胡僧祐為領軍將軍、陸法和為護軍將軍。仍令僧弁率衆軍追景、所至皆捷。

（『梁書』卷五 元帝本紀）

五月癸未、世祖武帝は遊擊將軍胡僧祐、信州刺史陸法和を派遣して民衆を率いて巴陵の援軍に向かわせた。任約は敗れ、侯景はそのまま逃走した。王僧弁を征東將軍、開府儀同三司、尚書令とし、胡僧祐を領軍將軍とし、陸法和を護軍將軍とした。なお僧弁に大軍を率いて侯景を追わせ、至る所でみな勝利した。

これは、陸法和が侯景の乱で活躍した当初、「信州刺史」であったという記録である。元帝本紀では、その後護軍將軍になったことが記してあるが、護軍將軍については、『北齊書』にも記述がある。ところが「信州刺史」については、正史では『梁書』のこの二箇所以外に全く記述がないのである。なぜ『梁書』のみにあり、他の史書に記載がないのかははっきりしないが、信州刺史の職は梁で授けられた、いわば無名時代のものであるために、『梁書』にしか記載がないのではなからうか。

一方、『梁書』には、陸法和の道術に関する記載が一切なく、極めて客観的な事実の羅列となっている。よって、『梁書』に見える信州刺史陸法和は、ただ侯景の乱で活躍した將軍の一人というに過ぎない。これは『梁書』は本紀の中の記述であり、『北齊書』『北史』は個人の伝の中の記述であるために、人物描写が詳しく

なったのではないかと思われる。『北齊書』『北史』の陸法和伝の方は、全編陸法和の異能にまつわる逸話で埋め尽くされているのである。

いずれにせよ、この『梁書』の記述は、陸法和が「信州」と深い関係があり、「陸信州」と呼ばれる可能性が大いにあったことを示しているのである。

『北齊書』『北史』に見える道術の記載と、『梁書』に見える「信州刺史」の記述は、先に述べたように、同時に同じ史書に載っているわけではない。このことが、『拍案驚奇』の注釈者達に、「陸信州」が陸法和だとわかりにくくさせた一因かもしれない。

（3）『資治通鑑』の記述

宋の司馬光が撰した『資治通鑑』では、各書を合わせて以下のような記述となっている。

景遣任約帥銳卒五千扼白堦以待之。僧祐由他路西上、約謂其畏己、急追之、及於芋口、呼僧祐曰、「吳児、何不早降、走何所之。」僧祐不応、潜引兵至赤沙亭。会信州刺史陸法和至、与之合軍。法和有異術、隠於江陵百里洲、衣食居处、一如苦行沙門、或予言吉凶、多中、人莫能測。侯景之围台城也、或問之曰、「事将何如。」法和曰、「凡人取果、宜待熟時、不撩自落。」固問之、法和曰、「亦克亦不克。」及任約向江陵、法和自請擊之、釋許之。

（『資治通鑑』卷一百六十四 梁紀二十簡文皇帝太宝二年）

侯景は任約を遣わして精兵五千を率いて白瘡でこれ（胡僧祐）を待ちぶせさせた。胡僧祐は他の経路から西上し、任約はそれを自分を恐れてのことと考えて、急いで追撃し、茅口まで行って、胡僧祐に呼びかけて言った、「呉の小僧、どうして早く投降しないのだ、一体どこへ逃げるつもりだ。」胡僧祐は返事をせず、ひそかに兵を率いて赤沙亭に行った。信州刺史陸法和が到着するのと待ち合わせ、これと軍を合流させた。陸法和は異術を備えていて、江陵百里洲に隠れ、衣食居所は、ひとえに苦行の僧侶のようであって、あるいは吉凶を予言しては、多くの中し、人はそれを推測することができなかった。侯景が台城を包囲した時、ある人が「事は一体どうなるでしょう」と尋ねたところ、法和は言った、「凡人が果実を取るときには、熟するまで待つのがよろしいのです。取らなくとも自然に落ちましよう。」かたくなに質問すると、陸法和は「勝ちもするし、負けもします」と言った。任約が江陵に向かった時、陸法和は自らこれを攻撃することを願い出て、湘東王繹はこれを許可した。

『資治通鑑』では、「信州刺史」である陸法和が胡僧祐とともに任約を討伐するのに功績があり、更に彼が「異術」を身につけていたと記している。『資治通鑑』編纂の時点では、この二つの要素はすでに結びつけられていたことがわかる。

ところで『資治通鑑』では、陸法和の道術の記述は、またそれまでの正史とは少し異なったものとなっている。

法和為政、不用刑獄、專以沙門法及西域幻術教化、部曲数千人、通謂之弟子。

（『資治通鑑』卷一百六十五 梁紀二十一元帝承聖二年）

陸法和は政を行うにあたって、刑罰や投獄を用いず、もっぱら仏門の法と西域の幻術で教化し、軍隊数千人は、通常弟子と呼ばれた。

ここでは、西域の「幻術」が新たに書き加えられている。また先の『資治通鑑』の引用では、『北齊書』にあった「道術」という言い方が「異術」と言い換えられていた。いずれの記述も陸法和の術の不可思議さを更に強調した言い方になっている。

宋以後、最もよく読まれた史書は『資治通鑑』である。故に明代の『拍案驚奇』の読者は『資治通鑑』の記述により、「信州刺史」陸法和と、「道術」の関係を理解できたし、また、陸法和を極めて不可思議な道術の使い手として認識していたであろう。

おわりに

以上の各資料の検討考察結果から、陸法和は確かに「道術」を身につけ、また「信州刺史」に任ぜられたことがあり、その上侯景の乱を平定する中で、「朝廷を補佐し」、大きな功績を残したことがわかる。つまり、まさにこの陸法和こそが、凌濛初の「得了道術、輔佐朝廷（道術を身につけて朝廷を補佐し）」、「建功立業、伝名後世（功業を立て、名を後世に伝える）」という二文に一致

する人物なのである。

『拍案驚奇』卷三十一中、「張留侯」と列挙されるべき「陸信州」とは、まさに南北朝時代の陸法和であって、張良と同時代の陸賈、あるいは他の人物ではありえない。

そして、陸法和は、明代の読み手にとって、「道術を会得して朝廷を補佐して功績のあった」「陸信州」として、容易に理解されたであろう人物だったのである。

*なお、この研究の成果は、『拍案驚奇』訳注(第一冊)―唐賽児の乱始末記―(古田敬一主編 汲古書院 二〇〇三年)に取り入れられている。

注

(1) 譚正璧『三元兩拍資料』(上海古籍出版社 一九八五年)参照。なお、『三水小牘』は『太平広記』卷二百八十七「侯元」に見えるものである。

(2) 『後漢書』卷七十一皇甫嵩朱雋伝。

(3) 『後漢書』では「徵貳」と表記される。

(4) 『後漢書』卷八十六南蛮西南夷列伝。

(5) 『晋書』卷一百孫恩伝、盧循伝。

(6) 王古魯補増注『初刻拍案驚奇』(上海)古典文学出版社 一九五七年。

(7) 陳邇冬、郭雋傑校注『拍案驚奇』(人民文学出版社 一九

九一年)。

(8) ただし、中華書局版の校勘記によれば、『北齊書』卷三十二は、元々は欠巻であった。『北齊書』陸法和伝は、『北史』陸法和伝、『南史』王琳伝と、文は基本的に同じであるが、やや違う所もあることから、直接これらの史書をみたわけではなく、ある種の史鈔からとったものではないか、と推測している。

(9) 『北史』では「容色常定」とする。

(10) やや時代は遡るが、仏教が中国に入った当時、道教と同類として信仰されたことは、楚王英についての記述に明らかである。「英少時好游俠、交通賓客、晚節更喜黃老、學為浮屠齋戒祭祀。……詔報曰、「楚王誦黃老之微言、尚浮屠之仁祠、繫齋三月、与神為誓、何嫌何疑、当有悔吝、其還贖、以助伊蒲塞桑門之盛饌。」因以班示諸國中傳。英後遂大交通方士、作金龜玉鶴、刻文字以為符瑞。」(『後漢書』卷四十二光武十王列伝)。黃老は道教、浮屠は仏教を指す。また桑門は沙門と同じである。楚王英は方士(道教の修行者)と交際し、道教的な行動を取っており、道仏が対立するものではなかったことを示している。

(11) 『北史』では「不撩自落」―「何勞問也。」―までが脱落する。

(12) 『北史』では「白羽」を「白羽扇」とする。

(13) 『北史』では、ここに「自称居士、後」が挿入される。